

デイリー・クライシス

奥野忠昭

今日は久しぶりに内勤だったので、損保会社の支店内で、一日中、書類書きをした。それで頭が綿菓子のようになり、動くのも億劫になった。若いときは徹夜してもどうということになかったのに、五十に手が届く歳になると、ちよつと根を詰めた仕事をするともう疲れる。

今日はいつもより込み入った書類が少なかったもので、残業をせずに終わることができたのに、身体がだるく、気分も憂鬱である。特に、午後からがいけなかった。

帰りの電車に三十分ほど乗り、駅に降りて、今、自宅のマンションへと向かっているのだが、途中、道端にある公園に立ち寄り、以前よくしたように、一息入れたくなった。

公園に入ると、すぐに長椅子に座った。この公園は広くもなく狭くもなく、いやに中途半端な感じを与える。設備も、ブランコや鉄棒やジャングルジムや滑り台など、遊具はそろっているが、どれもきわめて平凡なもので、これだけそろえれば公園と言えるだろうと主張しているように思えてならなかった。それに、周りに植えられているサクラやカシの幹は年代こそそこそこ経っているのにどれも細くて、葉っぱなどの力も弱々しい。まるで私を象徴しているようで、嫌悪感を覚えた。

数ヶ月前まではそこを根城にしてテント生活をしていたホームレスがいたのだが、公園周辺の住民の抗議で、どこかへ連れ去られた。彼がいるときは、そこに人間がいると思えて、いくら遅くなくてもこの公園にくると、安心してベンチに座れたのだが、今は午後七時近くになると無人の公園になってしまう。すると、公園全体に孤独臭が漂い、寂しさが強く流れて、時にはそれが私をほっとさせるのだが、時にはいたたまれない寂しさを覚えさせる。

それで、最近はこちらには寄らず、まっすぐ家に帰ることにしている。ここに寄って一息入れて帰ることが、何だか自分のひ弱さを確かめるようで、こんなことではますます厳しくなってきた会社での生存競争に耐えられないと思ったからだ。

だが、今日は違った。そんなことを考えずに素直に公園のベンチに座ることができた。辺りは薄暗いが、土の上にはまだ昼の熱気がかすかに残っていて、ベンチの下からほの温かい気流がそつと立ち上ってくる。

すでに蛍光灯に灯がともり、あたりを照らし始めている。私は、蛍光灯の上方にある空を見上げた。蒼さの残っている空には薄汚れた綿雲がいくつも流れていた。綿雲の周りが桃色に焼けていて、秋の典型的な空だった。

公園に入るとき入口の自販機で買った缶コーヒーの蓋を開けると、甘いコーヒーの匂いがした。どうかこれが気分を和ませてくれますようにと思いつながら、缶の口を唇にあてて飲んだ。冷ややかな液体がのどや食道を通過して気持ちよかった。

どうするかなど、今日の午後から何度も考えた問題が再びこみ上がってきた。どうして自分はこんなにも決断力がないのか、さつさとありのままを妻に言えばいいものを。だが、それにはかなり抵抗があった。もう少し、上手な言い方がないものだろうかと考えてしまう。

というのは、午前中に、支店長がわざわざ私に社内電話を掛けてきて「今日は店内勤務だろう。だったら昼食をいっしょにしないか」と言ってきた。支店長が電話を掛けてくるときは、ろくな用件ではない。だが、いたしかたがないので「はい、承知しました」と言った。

昼食は支店長といっしょに彼の好きなカレー屋へ行った。店に入って出された水を飲んでみると、すぐにカレーが出てきた。二人はしばらく無言で食べたが、一段落したとき、支店長が「ちょっと頼みがあるのだが、聞いてくれないか」と言った。

やっぱりな、と思ったが「はい、私のできるのなら何でも」と答えた。

「今週の日曜に近畿ブロックの支店長会のゴルフコンペがあるのだが、君、私の代わりに行ってくれないか」と言った。

「今週の日曜日ですか」と私は言いよんだ。

「何か差し障りでも」

「差し障りというほどのことでもないのですが、ちょっと頼まれたことがあって、調整してみます。たぶん大丈夫だと思いますが」

「頼むよ、その日、のっぴきならない用事があってね。君、支店長たちに顔売っておくのも悪くはないよ。それに本社から人事部長もやって来るらしいし、あいつはゴルフには目がなく、社内のゴルフコンペがあると、必ずやってくるのだから」

「はあ」

支店長は顔を斜めにして、私の顔を真正面から見つめ、にやりとした。それは「わかっているだろう。この支店で、支店長候補の推薦者としては君が最も有力な人だから」ということを意味していた。「断ればそれを逃すことになるよ」とでも言いたげなのだ。

「支店長になるのも悪くないな、給料も上がるし、本社勤務への道も開ける。同期の出世頭というのも気分のいいものだろう。今までの努力が報われるということなんだから」

と思った。日頃はそんなことを思ったこともないのに、それに支店長が魅力のある仕事だとは思えなかったのに不思議である。

「何とか努力してみます。一両日中にご返事いたします」と答えた。

と、何の脈絡もないのに、我家の天井のシミの形が思い浮かんだ。それは本当に蟻ほどの大きさなのだが、どうも一階上のどこから水が漏れていてそれが上階の床のコンクリートの割れ目からしみ込んで来たのではないかと妻の香織に言ってみたのだが、彼女には何も見えないと言うので、上の階の田上さんにはまだ何も言っていない。

だが、今はそんなことを考えているときではない。

実は、日曜日には妻の香織と久しぶりに観劇することを約束し、すでに二枚の前売り券を買ってある。それに今週の日曜日でその芝居は千秋楽らしい。もっと早くに行けばよかったのだが、あいにくそれまでの日曜日はすべて詰まっていた。先々週は、本社主催の「営業の効果的な在り方」についての研修会があり、先週は大口の得意先である旅行代理店の社長の母親が亡くなり、その葬儀に参列しなければならなかった。それに土曜日は妻のパ

ト先は休みではなく営業しているので、妻の休みは日曜と月曜となっている。

いったいどうしたものか。それに、これまでも香織と約束したことを何度もすっぽかした。香織が楽しみにしていた日帰りバスツアーで、これは一ヶ月半前に予約しなければならなかったが、損保関係の法律が改正になり、その日に、研修会が突如組まれ、支店の地域主任がすべて呼び集められ、研修を受けなければならず、旅行はキャンセルした。また、妻の母親が還暦を迎えるので、兄妹がより集まって、お昼に、お祝いの会が催され、私も出席することになっていたので、その前日に突如部下が脳溢血で倒れ、死亡するということになり、早朝、電話で支店長から呼び出され、支店として、お通夜や葬儀の連絡やら、それへの対応やら、彼の仕事の引き継ぎやらで、その日がつぶれた。それで、お祝いの会には出席できず、不義理なことをした。それで、今度の件を妻に言うのがつらかった。仕事だからいたしかたがない、と言えばそれまでだが、つい最近、高校のラグビー部の監督をしている教師が、あまり熱心に部の指導に力を入れ、家庭を顧みなかったため、妻が男を作って家出をしたと、週刊誌が報じていた。それを読んで私はぞっとした。不安がよぎったのだ。別に香織にそのような気配を感じたことはないが、それも香織をよく見えないせいかもしれない。

まあ、いたしかたがない。これが宮仕えと言うものだろう。私が今のところで働かせてもらっているから、マンシヨンのローンも払えるのだし、東京の大学に入ったひとり息子に仕送りもできる。男にとって仕事が一番。もし、リストラにでも遭ったらどうする。たちまち香織も困るだろう。「亭主元気で留守がいい」と言うではないか。香織は親しい友だちでもさそって観劇すればいい。その方がよほど楽しいかもしれない。香織はひよつとして内心喜ぶかもしれない。そう思うと少し気が楽になった。まだ日曜日までには数日ある。その間にいっしょに行ってくれる友だちを探すことなど簡単なことだろう。

だが、待てよ、と思った。家庭持ちの女性にとって日曜は閑などではない。亭主を家において出かけるのは容易なことではないだろう。夫婦共々に行動するのは易しいが、自分だけというのは難しい。孫の世話だつてあるかもしれない。そう思うと、また憂鬱さが飛び出した。何だか家に帰るのが億劫になった。もう少し、ここに座つてとりとめもないことを考えてみよう。だが、今まで温かかったベンチの下から急に冷たい気流が上りだした。晩秋といえども、まだイチョウの葉だつて残っている。寒さの厳しい季節ではないのに、この冷気はなんだ。外気よりも身体の方が冷たくなるような気がした。

私はゆつくりと立ち上がって公園の出口の方へ向かった。家の方へ歩き出すが、道にはいつもよりも人の数が多い。それに私と同じ方向に歩いている人より、こちらに向かってくる人の方が多い。彼らは一様に曇った顔をし、お互いに何かをしゃべりあっているのだが、みんな少し緊張気味で、しゃべらないではいられないといった感じである。

ふつと谷本さんとかという声が聞こえた。おやつと思った。谷本さんと言えば、同じマンションの私の住処より二階上の住人で、奥さんは女房の知り合いである。親友とまではいかないだろうが、よくお茶をしているようだ。何でも香織が所属している市民合唱団の一員らしい。香織の話を知っていると、きつちりとした性格で、完全主義者らしい。どうも無届けで例会を休む人がいると、そんな人は許せないらしく、役員でもないのにその人に電話をして、届けを出すように催促するらしい。それで、その人たちと折り合いが悪くなり、中には退会した人もいると言う。それに、辞めた人の中に谷本さんの会社の上役の

奥さんがいたらしく、谷本さんとはもめたということだった。それに彼女は会員仲間では評判がよくないらしいのだが、歌唱力が抜群で、団にはなくてはならない存在で、直接文句を言う人はいないらしい。香織もどちらかといえぱきっちりした性格で、だから彼女とよく話しが合うらしいが「あんな人がいると窮屈でかなわない。私たちは楽しむために来ているのに」というのが大方の意見だそう。だが「合唱はみんなのレベルがそろわなければならぬのに、練習を休んだりしてそろわなければ合唱は成り立たない。そんなのは苛立つだけで、ちっとも楽しくはない」というのが谷本夫人の意見らしい。

住処のマンションの入口に到着した。驚いた。私の棟のベランダから少し離れた自転車置き場の前の通路と植え込みのところに正方形に黄色のテープが張られて、立ち入り禁止にされ、警官がひとり立っていて、囲われた中に数人の警官が白墨で人の絵を描いたり、辺りに散らばっているものをくまなく探したりしている。その人たちを囲むようにしてテープの外側にまだ数十人の見物人がいた。マンションの住人もその中に混じっていて、彼らの何人かは私の棟を見上げたりしている。

「いったいどうしたのですか。私はこの棟の住人なのですが」と、立っている警官に尋ねてみた。

「人が五階から転落して、救急車で運ばれたんですが、心肺停止状態なのでおそらく死亡しているでしょう」

警官は何人もの人に尋ねられたと見えて、めんどくさそうに私の方に顔も見せずに言った。

「自殺ですか、事故ですか」

「それは分かりません」

これもつつけんどんに答えた。

「いったいどなたが転落したのですか」

警官は何も答えず、テープに沿って私から離れた。警官はもう何も答えないだろうと思いい、見物人の中に同じ棟の住人を見つけ彼に近づいた。彼とはエレベーターでいっしょになり、挨拶だけは交わす仲である。

「どなたかが転落したのですか」

彼に尋ねた。

「谷本さんらしいですよ」と答えた。

「ええ、谷本さん」

私は声に詰まった。身体が少し震えた。どうしてまた。どうして彼が転落などしたのだろうか、と思った。まだ、転落の事情も分からないのに私はすぐに自殺ではないかと思っただ。事故の可能性だけである。このマンションはベランダの手すりが低い。背の高い人なら、下をのぞいただけで身体が乗り出してしまふ。高くするようにと管理組合に要求しているのだが、今度のリフォームのときにそうすると言っていてすぐには直されなかった。だが、そういうわけか、自殺したのではないか、という思いは消せなかった。

「よく見る顔でしたが、名前は知らなかったのです。誰かが谷本というひとだと言っていましたから」と男がつけ加えた。

「自殺ですか、事故ですか、それとも他殺？」

「事故でしょう。彼はわれわれよりかなり背が高いでしょう。それに、ベランダの天井の

ところの樋の継ぎ目が少しずれていて、水漏れがするので、それを直そうとしていたそうで、乗っていた脚立が傾いて転落したのではないですか」

「誰かがそれを見たんですか。それとも谷本さんの奥さんがそう言っているのですか」

「いいえ、うちの家内が、谷本さんの奥さんが、先日ベランダの樋が壊れていると言っていたと言うものだから、私がそう思うだけです」

「だったら、まだ事故と言えませんね」

「でも、警察はきつと事故で処理しますよ。それが一番簡単だから」

「そうですかね」

「そうですよ」

彼はそういうと、もうそこにいるのが飽きたというふうに、黄色のテープから離れて、棟の玄関に向かって歩き出した。

谷本さんとは、朝、家を出る時刻が同じで、よく駅までいっしょに歩いた。しかし、ここ数週間ばかり彼を見ていない。谷本さんにいったい何があったのだろうか。自殺なら原因は何だろう。彼とは道すがら会社や仕事のことを話しながら歩いた。それがもう数年にもおよぶ。私がこのマンションに引越してからすぐに彼とはいっしょにならなかった。だから、私がこのマンション中で一番よく彼のことを知っている人物なのだ。彼はよく仕事の愚痴をこぼしていた。だからだろうか、彼がどうも自殺と思えて仕方がないのだ。

私だつてベランダから下を覗き、ここから飛び降りれば自殺できるな、とときどき思う。仕事がかまくいかないときとか、香織に愚痴をこぼされたときとか。そんなことを考えていると、ふと、いつか見た夢のことを思い出した。かなり広い川の真ん中で私がひとり小舟を漕いでいる。舟の底に穴が開いて、そこから水が中へ入ってくる。最初は少しの量で溜まった水をバケツのようなもので一度掻き出せばそれしばらくは小舟は安泰だったのだが、穴が少しずつ大きくなるのか、舟に入ってくる水の量が増えてきて、少しずつ舟に水が溜まりだした。さらに水がどんどん溜まり、舟が傾きだし、私は大声で助けを求め、辺りには誰もいない。私は泳げないので舟が沈めば私も沈む。舟が大きく左右に揺れ、それにつれて私も左右に大きく揺れる。それでも必死に小舟にしがみつき大声で叫びつづける。そのとき、身体が揺さぶられ、途端、私は目を覚ました。私の目の前に香織の顔があった。ああ夢か、よかった。助かった、と思った。

「何をわめているの。大声を出して。私、眠れないじゃないの。どうしてくれるのよ」
香織は怒って、猛獣の目をして言う。

「ごめん、ごめん」と詫言ながら、よかった、よかったと思う。この場合は香織よりも夢の方が怖かった。

私はエレベーターに乗りながら、今度は、テレビで先日、過労のため鬱病になり飛び降り自殺をした女性のことを思い出す。谷本さんもひよつとしてそれではないか。いつか、残業が多い、いや多すぎるとこぼしていた。そういえば朝出かけるときはいっしょになるが、帰りにいっしょになったことがない。私も残業が多いが、彼の方がもっと多かったかもしれない。だから、私の帰る時刻には彼はまだ社の中か、帰りの車内だろう。疲れすぎて、ふつと飛び降りの魅力に取り憑かれたのかもしれない。過労自殺という言葉が思い浮かんだ。

すると今度は先日の営業担当者会議を思い出す。そこで一ヶ月の営業成績の発表会があ

り、先月の営業成績が発表されるのだ。私も成績があまりよくなかったが、ノルマを十分に達成していたので、緊張することはなかった。結果、一番にはなれなかったが、五位以内には食い込んだ。古参でA地区担当主任の私が下位なら若い者に示しがつかない。もし、そんなことにでもなればたちどころに支店長に叱られる。「おい、この頃、いい加減な仕事をしているのではないか。君の趣味、それ、何とかのカメラの会、あれにのめり込んで仕事眼中にないのではないか」と皮肉たっぷりと言われるだろう。以前、市の芸術祭のコンクールに私の作品が入賞してそれが彼の目にとまったのだ。いままで社に知られないようにしていたのだが。彼はきつといい気がしなかったのに違いない。

だが、そんなことを言われる筋合いはない。毎月、土曜日に行われるクラブの例会には最近ほとんど顔を見せていない。だから、実力でも、若い者に抜かれている。カメラは撮らないとすぐに腕が落ちる。写歴が長いだけで最近はろくな写真が撮れていない。それらはみんな会社のために働いているせいだ。客から、火災保険で、家が全焼したのに、半焼にされた、納得できないとか、旅行保険を二社に掛け、損害を受けたので、二社から保険が降りると思っていたのに、一社からしか降りない、そんなことは聞いていなかったとか、いろいろクレームがくれば、私の受け持ちではなくても、たちどころに私が呼び出され、対処させられる。若い者の不手際の尻ぬぐいは全部私の仕事である。休日だろうと、何だろうと、とにかくクレームがつけば、早い処理が勝負である。早ければ早いほど誠意を見せたことになる。だから、発生と同時に私が飛んでいく。できるだけ加入者の得になるようにする。会社はいい顔をしないが代理店は喜ぶ。そうすることで代理店の信用が高まり、保険の売れ行きが増すからである。

先月、ノルマを達成できなかったのはB地区の中堅に近い営業マンのみだった。彼は青ざめていた。彼が最下位になるのが三ヶ月前と今回だった。昨月はきつと成績に水を入れて誤魔化したのに違いない。それが今月に跳ね返り、また、最下位になったのだ。だから、彼はみんなの前で追及される羽目になった。支店長はねちねちと彼を責めた。「君は我が社のエリートのはずだ。この成績じゃ、恥ずかしくはないのかね。新入りにも負けている。これじゃ、もし、リストラが来たら、君を一番に挙げなくてはならなくなる。わたしはそうしたくないから叱責するのだ」

一種の脅迫まがいの叱り方だ、あるいは。パワハラと言われかねない。しかし、もし彼がパワハラとも言えれば、たちどころに嫌がらせを受け、遠方へでも飛ばされるだろう。それに、成績を上げられていないことは確かだ。だから、自分の能力に対する自信も揺らいでいるに違いない。少しは名の知れた大学を出ている彼は将来管理職にするために採用されたはずだ。だから、そこそこの成績を上げれば、すぐにでも本社勤務になれる身だ。本人にもそれが分かっている。だから、いっそう焦りが強いのではないか。彼の同期はすでに何人かは本社勤務になり、企画担当や、資金運用関係に回っている。

学校では成績がよく、叱られた経験がないので、本気で叱られるのが今回が初めてか。だから、支店長の叱責の間じゅう彼は震えているのか。目から涙が零れ落ちるのを必死でこらえているといった有様だった。もし、彼が自分だったらとみんなが思ったに違いない。新人りならどうってこともないかもしれないが、彼は中堅に近い、それが新入りの成績にもなっていない。彼がこのような成績に陥ったのは数ヶ月前からだ。いったい彼に何があつたのだろうか。身体が変調でも来しているのか。それとも家庭に何か不幸でも起きたのか。

ひよっとして夫婦の間に何か問題でも。あるいは、こんな仕事はつまらない、これをずっと定年までつづけるのは耐えられないとでも思い始め、精神的な病にでもなってしまったのか。

そう思うと、私はひやりとする。自分と妻との関係だって表面上は波風が立っていないが彼女が何を考えているのか分からない。仕事、仕事の自分の態度に不満を抱いているに違いない。彼女の要求にほとんど応じられてはいない。それに自分は女性の気持ちを汲み、癒やしの言葉をかけられるような器用な男ではない。母一人、子一人で育ったわがまま男である。だが、それは致し方のないことで、自分の責任ではない。香織は、大人になれば自分の欠点は自覚すれば直せるという。だが、子どもの頃に身についたものはそう簡単に直せない。

そんなことを考えながら、マンションのエレベーターに乗り、三階で降り、自分の家の扉を開け、家に入った。

「おかえり」

香織はにこにこしながら私を出迎えた。香織の機嫌がよさそうで、ほっとする。飼犬の権太もしっぽを振って出迎えてくれた。

すでに食事の用意もできていて、何だか今日の部屋は明るそうだ。五階の谷本さんの家はたいへんだらうに、と思う。他人の不幸は蜜の味か、と声に出さない独り言を言う。そういえば、最近、独り言が多い。

「谷本さんのこと知ってる？」香織は明るく言う。

「ああ」

「下、たいへんでしよう」

「いや、だいたいおさまっているよ」

私は、勤め用の洋服を脱ぎ、普段着に着替え、食卓に座る。

「わあ、こんなにたくさんの料理を作ってくれて、たいへんだっただらう、俺の大好きな鯛の刺身まである。それから、ポテトサラダやほうれん草のオシタシ」

私は喜んでみせる。それらはみんなスーパーでお総菜として売っているものばかりだ。だから、あまり喜びすぎると皮肉に聞こえるので、少し抑えた声で言う。ネズミの鳴き声のような声になる。

「谷本の奥さん、たいへんだらうなあ」と私が言う。

香織はそれには答えないで、きゆうすにお湯を注いでいる。

「旦那さん、酔っ払っていたと言うから。ほんとに事故かしらね。下の広場にいて落ちるのを目撃した吉田さんがいろいろ警官に尋ねられていたので。私、急いで降りてそれを聞きに行ったの」

「谷本さん、酔っ払っていたのか。彼、酒が弱い、すぐに酔っ払う、と言っていたが」私はまた、今日の営業成績発表会を思い出す。青ざめていたあの男もしらふでは帰れないだらう。きつと酒を飲んでいてに違いない。どこかの駅近く一杯飲み屋で。酒の弱い彼が酒を飲めばどうなるか。

谷本さん、酒を飲んでいたのに、ベランダの桶を直そうとしたのか。奥さんはそれを止めなかったのか。

むしろ、旦那が酔っ払って帰ってきたのを見て、むっとし、奥さんが叫ぶ。「いつもい

つも遅く帰ってきて、いつ直してくれるのよ。あの樋、水が下に落ちてきて、ベランダが水浸しになるのよ。直すのなんか忘れてるんでしょ。家のことなんかとつくの昔に」
「忘れてなんかいるものか。仕事が忙しいだけだ。それに夜は直しにくい。休みの日に直すつもりだ」

彼も、営業をやっていると聞いていた。ひよっとして、彼の成績が悪く、上司から叱責を受けたのかもしれない。「俺は支店で営業成績がビリだったので、むしゃくしゃして一杯のんできただけなんだ」なんて妻に言える人間はいたいどれくらいいるだろうか。そう言えたものではない。私だって言えない。

「だったら、今日なんか、早く帰れたんでしょう。お酒なんか飲まないで帰ってきて、直してくれたらどうなのよ」

奥さんの声が私の耳元で鳴る。

私だって、酒が好きなら、公園なんかに寄らずに、酒場に寄るに違いない。谷本さんは何か会社で面白くないことがあったのに違いない。上司にとつちめられたのだ。いや、ひよっとして「おれはこのようなことに一生を費やして悔いはないのだろうか。たかがしれた会社で課長の部長のと騒いでみたところで井の中の蛙の騒ぎだ」なんて思いだしたのではないか。もっと別の生き方だって自分はできたはずだとか。

そういえば、私だってふつとそういう思いにとらわれることがある。カメラのコンクリルに応募しながら、これが会社にはれたらまずいなあ、なんて思ったりしているときだ。なんとみみっちい考えにとらわれることか。「あいつは、会社のことは二の次にして、自分勝手なことにうつつを抜かしている」などと揶揄する上司がきつといるはずだ。会社は私のすべてを捧げることを要求する。家庭だって会社のためにある、とでも思っているのではないのか。しかし、それには一理がある。サラリーマンにとつて自分を支えるものは会社しかない。会社こそ自分の生きる基盤なのだ。

ただ、こんなふうを考える自分に腹が立ち、自分だってもっと確かな基盤があれば、別の生き方だつてできたのではないか、と思ってしまう。

「何だか浮かぬ顔ね。ご飯を食べるときぐらい、もう少し楽しく食べたらどう」

香織の怒りの声が飛んできた。私はものを食べながらいろいろ考え事をする癖がある。

これは小さいとき、母が働きに行っていて、帰りが遅いので、常に一人で食事をしなければならなかった。その名残のようなものだ。

いつも香織が言う。

「食事をするときは楽しい会話をしましょう。せつかく作った料理の感想など言って欲しいのよ。ただもくもくと食べられたんでは、いらっとするわ」

ずっとひとりで食事をした人間に会話をする習慣などつけようがなかった。

「ごめん。いや、谷本さんの死があまりショックだったから。年齢がよく似ているし、仕事も同じようなものだったから」

そう言いながら、支店長の要求で今度の日曜の観劇会に私がいけないことを告げないといけないのだ、と思う。でも、これじゃ、支店長の要求を言い出せない。しばらく様子を見て、よい機会を見つけることにしよう。

そうだ、料理をさらに褒めなくてはいけないのだった。私は食卓を見回すが、先ほど気づいたように、すべてがスーパードから家に移動したもので、強いて言えばお茶ぐら

いか。

「このお茶、おいしいよ。俺が入れるとこんな味がしないのに。何ががうのかな」私は香織の顔を見て言う。香織は表情を変えない。ますます機嫌を悪くしたようだ。

「愛がこもっているからだろう」これはちよつと言い過ぎた。

「私、谷本さんの転落、未必の故意とかいう殺人事件だと思うわ」

突然、香織が今までずっと考えてきたことを述べるというふうには、息を詰まらせ、言葉が終わると同時に何度も咳き込んだ。

「ええ、おいおい、めっそうなことを言うなよ」と叫ぶように声を出したつもりなのに声は小さい。

「どうして？」と私が続けて言う。

「奥さんの話、いつも聞かされているから、なんとなくよ。谷本さんの旦那さん、子どもが小さいとき、いくら世話を頼んでもしなかったらしいし」

「だって、奥さん、専業主婦だったのだから」

「専業主婦だって忙しい時があるのよ。あるいは、気晴らしをしたいとか、自分のやりたいことをやりたいとか。それに、脳梗塞で寝たきりの谷本さんのお母さんの世話を三年間もやったと言うんだから」

「そうだったのか。たいへんだっただろうなあ。そんな協力があつたからこそ、谷本さん、営業課長に手がとどきそうになれたんだ」

「へえ、谷本さん、営業課長に」

「なつたとは言わなかったな、もうすぐなれそうだと行ってた。確か、企業むけ部門の営業課長だとか言っていたな」

ひよつとしてなれなかったのかもしれない、と思った。あるいは、最悪、リストラの対象に挙げられ、肩たたきされたとか。そうなら、こんなに努力してきたのはいったい何だったのか、と思ったのに違いない。一気に仕事への意欲が失せただろう。たとえ自殺などという意識的な思いがなかったとしても、脚立が傾いたときでさえ、まあいいや、と身を守らなかつたのではないか。

私は、彼が奥さんに言ったであろうことを思い浮かべた。

「お前のために、俺は課長になれなかった。お前が上司の奥さんを合唱団から追い出したためだ。それを根に持って彼女の夫の人事部長が俺を課長にしなかったのに違いない」などと。奥さんはかつとなる。誰のおかげで、あんた、仕事ができていると思っているのって。それで、旦那を危ないベランダの天井の樋の直しに追いやったのかもしれない。

「あの夫婦、あまりうまくいってなかったみたい。私に会ったら、いつも旦那さんのことで愚痴っていたもの。トイレの電気を消して、と言っても消さないし、パソコンでアダルトビデオを見ないで、と言っても見るし、朝、私が忙しくしていても悠然と新聞を読んでいるし、家事をまったく手伝おうとしないの。またできないのよ。茶碗だって、彼が洗ったら米粒が茶碗にこびりついているの。カップの柄が油っぽいのにそのまま。私も今は少しの時間だけパートで働いているのに、家事を私だけに押しつける。それに文句を言うって、仕事をしてくれとは頼んではいない。仕事を辞めるよと言うし。私も社会と繋がってきたいのに、それをまったく理解しない。結婚記念日でも会社の仕事だと言って、帰ってこないし。日曜日には接待ゴルフだと言って出て行くし。口を開けば、俺は家族のために

一生懸命働いている。家にいるときぐらいはほっとさせてくれって。俺が働いているから、この家のローンも払えるのだし、息子を留学もさせられるのだから、と言う。まるで彼一人の力で留学させたみたいだ。息子を育てたのはほとんど私だということを忘れてるわ。そう思うと腹がたつ。ときどき殺してやりたいと思うときがあるわ、なんて言っているもの」

「俺だって、上司を殴り殺したいと思うときがあるよ。でもね、思うのと実際に行きするのとは違うだろう」

私は香織の言葉に奇妙な苛立ちを覚える。何だかそれは私のことを言っているような気がしてならない。彼女をぶん殴ってやりたいような怒りが生じる。

家でゆっくりしたい、あるいは、土、日に写真を撮りに行きたい。でもお得意様からゴルフを誘われれば断るわけにはいかない。土、日にお客との打ち合わせや話し合いをしなければならぬときだ。地域主任などという管理職まがいな足を突っ込めば、ブランク企業なみに働かされる。それをこなせないようだと、出世はおろか、肩たたきのリストラが待っている。会社では出世を目論んで必死にやらなければすぐに落ちこぼれになる。「男はなぜこうもつらいのか」という本を読み、つらさから解放されようと思っても、そううまくはいかない。肩の荷なんか下ろせない。

現に今日の日曜日だって、行きたくもないゴルフに行かされる。それを女房に言うのにどうしてこうも苦しいのだ。いや、不安なのか。

たかが他人の死について話し合っているのに、どんどん不安が強まっていく。

私は、食べた食器をキッチンに流しへ持って行こうとして、キッチンの端の雑巾掛けに見覚えのある模様の雑巾がぶら下がっているのに気づいた。おや、と思い、待てよ、とそれをじっと見る。それは私の大好きだったトレーナーが雑巾に化けているような気がする。あのトレーナーは私にとって着心地がよく、しかもよく似合っていると思っただけか、あれがなくなっている訳ではないだろうか。

食器を流しに置いて、慌ててクローゼットへ取って返し、中を覗くと丁寧にシャツやズボンや背広の上着などが掛けられていた。私が乱雑に掛けておいたのを香織が掛け直してくれたのだ。一着一着見ていったが、トレーナーの上着がなかった。ズボンがあるのに上着がない。ひよっとして香織があれを切り裂いて雑巾にしたのかもしれない。あの上着が好きだったので、頻繁に着ていた。それで、新品と比べれば確かに色がくすんだり、袖口のところ少し擦り切れたりしていたが決して着ることができないほどではなかった。あれの代わりがないのだ。あれを着ると身体がほっこりし、気分がよくなるのだ。

ひよっとして、飼い犬の権太の汚物拭きにも使われているのではないかと思ひ、台所から玄関の犬用の用具を入れてあるところへ行き、靴入れの横の物置を開いた。あった。そこには、いろいろな形に切られたトレーナーの布切れが積まれていた。

どうしてあれを私に相談もなしに雑巾や権太の汚物拭きにしたのか。あのトレーナーは私にとってはかけがえのないものだったのに。

香織はそれを知っていてわざと切り裂いたとも言える。私が何か彼女の気に触るようなことをして、その仕返しに、ずたずたに切り裂いて雑巾や汚物拭きにし、その一部を私の目につくところに掛けてあるのかも。

だが、ここぞうろたえ、怒りの声をあげてはだめだ。それは香織の思うつぼにはまるこ

とだ。落ち着け。こんな場合、まったく気づかないふりをするに限る。怒ってみたところ、もとに戻るわけではないし。私は再び食卓へと取って返した。お茶の続きを飲む。「ねえ、ねえ、あなた、何か気づかない」

突然香織が言う。食卓の対面からじっと私の方を睨みつけた。トレーナーが雑巾に化けていた。そう言おうか。それはまずい。いったいその他に何が変わったというのか。私は少しびびる。何も気づかない。いったい何が替えられたのか。

「ええつとね。下駄箱の花瓶の花が替わっていた」と私が言う。

「あれ、三日前に替えたの」

「いよいよ不機嫌さが外に出て、声がどす黒い。」

「ああそうか。では、ええつと……」

次に何を言おうかと焦る。

「ああ、テーブルクロスが替わっている。白から薄いオレンジに」

「それは一週間前。もういいわ」

「そうか……。ねえ、何かかわったの」いよいよ焦る。

「もういいわよ。たいしたことではないから」

「言えよ。何が変わったのか」

「いいのよ」

明らかに気分を害している。これはまずいな。今晚は日曜のことを言える雰囲気ではなさそうだ。

谷本さんも何か奥さんのかんに障る決定的なことを言ったのかもしれない。それはどういうことなんだろう。「俺が課長になれなかったのはお前のせいだ。お前が部長の奥さんを合唱団から追い出したせいだ」と言うのを私は先ほど思いついた。それはかなりかんに障る言葉だ。そのほかに何か。「息子からまた金を送れって。先頃送ったばかりではないか。いったいお前、どんな育て方をしたんだ」とか。

「いったいお前、うちの支社長が言っていた。」

「女は怖いよ。俺の住んでいるマンションの駐車場で、ある家の車のタイヤの空気が抜かれる事件が起こってね。大騒ぎになってね。誰がそれをしたのかって。タイヤに釘が打たれて穴があげられていたんだ。しかも、それを直した夜にまた同じことが起こってね。その家を憎んでいる者がいるに違いないって、警察まで来て。ところがある夜、偶然に車のことが気になって、駐車場に降りて行った人がいて、すさまじい勢いでタイヤに釘を打ち付けている人を見つけ、とっ捕まえたら、なんと、その車の持ち主の奥さんだったって。ご主人に腹が立って、それをするとすっとしたんだって。こわいね。だから、女性社員には特に気をつけてよ」

するとある本で読んだ言葉を思い出した。「家では妻に勝とうと思うな。勝ちたいと思うな。家では百パーセント妻が正しい。反論しても無駄な抵抗」

私は再び香織の顔を見つめる。彼女は下を向いてじっと考え事をしている。何かたいへんなことを決意しようとしているような様子だ。まさか、自分に親切にしてくれ、しかもかつこのいい若者がいて、彼からセックスをせがまれ、受け容れてやろうかしら、なんて考えているのではなからうな。

そんな馬鹿な。香織に限ってそんなことはないとは強く否定した。いくら文句や悪態

をついたとしても、心の底では私を好いてくれているのに違いないと思っている。

それにしても、いったい何がかわったのだろうか。気になって仕方がない。なんとしてもそれを見つけ出さなければならぬ。

帰ってきてから私が見たものをすべて思い出そうとした。最初に見たのは玄関の下駄箱の花。それはだめだった。中の靴。何も変わっていないかった。スリッパを履いたがそれも同じだ。居間から、物置代わりに使っている四畳半の部屋で上着やワイシャツやズボンを着替えて、居間へ。クローゼットの中のものと同じ。それから……。何も見つからない。待てよ。見たもので何か抜けているものがないか。はっと思いつく。ううん。そうだ、香織の顔だ。玄関を開け「ただいま」と言ったとき香織が出てきて機嫌良く「お帰り」と言ったではないか。「機嫌がいい」と言うのがいつもと違うことか。だが、そんなことを言えば香織の気分をそこねかねない。それではないだろう。食卓の前の香織を見つめる。何か変わったことがないか。何かちよつと変わっているような気がする。だがはっきりとしない。そのとき、会社で若い社員が言い合っている言葉を思い出した。部屋に入ってきた同僚の女子社員に、先に出勤して席に着いていた若い男性社員が言った。

「おお、髪型、変えたの」

入ってきた女子社員はうれしそうな表情をした。

「わかった？ 昨日、美容院に行つて少し髪を短くしてもらつたの」

「似合うよ。それ」

「そう。ありがとう」女子社員はさらにいっそうほほえんだ。

そういえば、香織の髪の後ろがすつきりしている。ひよつとして、美容院へ行ったのかもしれない。言ってみる価値がある。

「ああ、わかった。髪型が少し変わったのだ」

私は大声で言う。香織はしばらく黙っていたがようやく言葉を出した。

「遅いわ。気づくの。私は花やテールクロスより関心が薄いからね」

「ごめん、ごめん。香織の顔ばかりを見ていたものだから。頭の後ろが見えないし。それに、きょうは谷本さんのショックな事件があつたものだから、気が動転してしまつて」

私はようやく変わったものを見つけかけてほつとしたが、香織はあまり表情を変えない。でも、きつとまんざらではないだろう。それよりも自分に香織の様子に気づける感覚が残っていたことがうれしかった。一応、よかつたと思つた。会社でその月のノルマを達成したときと同じ気分だ。

ところが、ほつとすると同時に谷本さんのことと日曜のゴルフのこととかがまた意識に昇つてきた。谷本さんの転落は香織の言うように「妻の未必の故意による事故、広い意味での他殺」なのか。それとも自殺なのか。ただの偶然的事故なのか。他人の家のことなのに気になって仕方がない。それに香織はどうして他殺説に固執するのか、それも気になつた。

しかし、そう言われれば思い当たることもある。かなり以前の夏のことだが、職場へ行きしな、谷本さんが腕に包帯を巻いていた。かなりひどい傷のようだった。「どうしたんですか」と聞くと「いや、ちよつと階段から足を踏み外してね」と決まり悪そうに言つた。夕食時に香織にそれを言うと「そう、それ、きつと谷本さんが寝ているとき、奥さんが谷本さんの腕を思い切りテレビのリモコンか何かで殴つたのだわ」と言つた。「おい、

どうしてそう思うんだ」と聞いてみると「いつか、彼女、言っていたもの。うちの旦那、本当に腹の立つことを平気で言うのよ、お前はいつも家にいて、テレビの韓流ドラマが見られていいな、とか。昼間、お前が何をしようと、注意するやつがないから気楽でいいとか。昼間でも、今晚のおかず何にしようかと考えたり、買い物に行ったり、洗濯をしたり、掃除をしたり、マンションの自治会の役員を割り当てられたときなどは、彼の代理でほとんど私がしたのよ。それに、子どもが小さいときは、どんなにたいへんだったか。子どもが病気をしたら寝ないで付き添ったり、学校だけがをしてきたら、いじめられているのではないかと心配したり、ほんとに殴つてやろうかしらつて思ったわ。私だって、働きたかったのよ、それを無理にやめさせておいて。パートで働くと言ったら反対して、妻を自分の奴隷としか思っていないみたいと愚痴っていたから。それを本気でやったのかもしれないわ」と香織は言った。

私はそんなことを香織に言ったことはない。だが、ときどき谷本さんと同じようなことを思うことはある。今日の会社の発表会で攻められ、狂気じみた顔つきになっていた営業マンなら、きっとそう思うだろう。

私だって、腕に覚えのない傷があった。つねられた後のような、明らかにうちみではない傷だった。なぜそんなところに傷があるのか、それが不思議でならなかった。

私が知らず知らずに香織の気に障ることを言ったかもしれない。それに気づかないでいる私を憎んで、寝ている間に腕をつねったのではないか。例えば「A君は、自分の得たお金の三分の一が小遣いだって。彼の奥さんが会計士で収入がすごいから」とか、「B君の奥さんのお父さんが亡くなって、奥さんに遺産がしこたま入ってきたんだって」とか、「うらやましそうに言ったことがある。また、「今夜のおかずはいやに塩辛いね。私の血圧を上げようとしているんじゃない」と冗談まじりに言ったことだってある。今思うと香織をいたく傷つけたかもしれない。家事だって、ほとんど香織任せだった。専業主婦だからそれぐらいするのはあたりまえ、と思っていたことがあった。朝、子どもの学校へ行かすための準備と朝ご飯のしたくなどで忙しくしていても、こちらも会社ではてんでこ舞いするんだからと思いついて、コーヒーをゆっくりと飲んだ。

まあ、とにかく、今夜は日曜のゴルフのことを言うのはよそう、だが、そう思うと、難しいことをただ先送りしただけなのに、いやにほっとした。

「ねえ、ねえ、昨夜、起きても思い出せるほどの夢を見たのだけど、言っている。怒らない」と香織は、やや明るい声になって言った。

「ああ、どんな夢」

話題を変えてくれたのでほっとした。隣の主人の事故についてはもう考え合うのはよそう。なんだかとても危険なことを話し合っているようだ。

「あのね、あなたと私が帆船に乗っているの。それで、どういうわけだか知らないが、私はえらく怒っているの。そして、あなたを追い回しているのよ。あなたは、マストによじのぼっているのね。しかも、もう少しで落ちそうな感じで。私とその顔がともおもしろくて仕方がないの。だから、私もマストによじ登りだしたの。そして、あなたの足を掴もうとしているの。あなたは、私を振り払い、ますますマストの先へよじ登っていくのよ。

マストが左右に、おおしく揺れるの。あなたは、必死にマストにしがみつくの。それを見て、私は怒っているのに、大笑いしているの。変でしょう。小学校の教科書に『とびこめ』

という教材があったでしょう。あれを思い出したのかな」

話題が変わったと思ったのだがそうではないらしい。「とびこめ」という教材は、確か少年が猿を追ってマストの頂上に登り、下りられずいるのを父親が「海へ飛び込め、でないと撃つぞ」と脅かして少年を海へ飛び込ませ、船の上に落ちて大怪我をするのを防いだというものだった。だが、香織の話には私を救う手立ては作られてはいない。それに私は泳げないので海にも飛び込めない。落ちれば一巻の終わりである。

「くわばら、くわばら」と私が言う。香織は笑った。

私だって谷本さんと同じことになりかねないぞ、と思う。だが、それを避けるためにどうしたらいいのか、私にはわからない。

ただ、とりあえず「日曜日のゴルフ」は断った方がいいという気があぶくのように湧いてきた。もつと知恵を働かし、支店長をも納得させ、日曜の観劇会にも行けるようないい案がないのか。そのくらいの策略をろうしても卑怯でも何でもない。私は少し会社を絶対視しすぎている。だが、そのような案を思いつけるだろうか。いや、なんとしてでも思いつかねばならない。

頭を下げ、耳の下がかゆくもないのにごしごしと掻きながら私は考えた。何だか思いつきそうな気がするのだ。頭の先まで思い浮かんできているのに最後の一步のところまで止まっている。私が断らないでも彼から「あれはもういい。済まないことを頼んで申し訳なかった」と言わせるようないい方法。思い浮かべろ。あるだろう、そのような方法が。

ううん、と言いながらまぶたに力を入れて顔をしがめてみた。

「ああっ！」と思わず声をあげた。いい方法を思いついたのだ。そうだ、そうしよう。私の心は、雨雲の間のわずかな隙をついて太陽が顔を出したように輝いたに違いない。あまり器用でない私としては上出来な考えだ。そうだ、代理店の脇田に頼めばいい。あいつにはいくつか恩を売ってある。ほとんど値のつかない彼の顧客の車を顔見知りを通じてかなりの値段で売ってやった。それに、彼の息子が理系で、女の子をうまく見つけられないというので、うちの従業員で気立てもよく美人の女性を紹介してやった。それがうまくいって、今、夫婦円満らしい。彼も大いに喜んでる。孫だって昨年生まれたそうさ。

よし、私は電話置き場に行き、受話器を取り上げたが、それを少しの間止め、「香織」と呼んだ。ウグイスよりもいい声を出したと思った。香織は食卓に肘をついて、テレビを見ていたのだが、不意の私の声に瞬きを繰り返しながら、こちらを見つめた。「何よ、そんなに大声を出さなくたって聞こえるわよ」と言った。テレビを見るのを邪魔されたのが不服なのか、まだ、約束した夕飯の食器洗いが私の役割だが、食器は台所に放りっぱなしなのが不服なのだろう。

「今日の日曜日、観劇に行くだろう。その後、その近くにとびっきりおいしいフランス料理店があるらしい。同僚が行ってきて、満足したって言っていたから、それ、ご馳走するよ。彼から電話番号まで教えてもらっていたから。今から予約するがいいかな。お前、フランス料理食べたいって言っていたじゃない。俺、すっかり覚えているんだ」そう言いながら彼女の顔を眺める。不機嫌な顔が少しは緩和されるか。

「へえ？ また、どうしたのよ。何か、とんでもないことをしてかしたの。それで、先手を打つつもり」

「冗談じゃない、何も無いよ」

「そう、じゃ楽しみにしておくわ」

それでも彼女は不審そうに首を何度も捻りながら私の方を見続けた。受話器を置き、私は同僚からもらった店の名刺を取つてくると言つて、鞆の置いてある部屋へ向かった。部屋に入り、すぐに、ポケットから携帯を取り出し、支店長の件を断る方策を脇田と打ち合わせるための電話を掛けた。ここなら、香織に聞かれずにすむ。

脇田はすぐに出た。ことのいきさつを手短かに話し、何か君の方から支店長に「あいつ、支店長からゴルフへ行くとの依頼があつて、日曜日の私との約束を反故にすると言つてきやがつた、とか、何とか言つて、怒りの電話を掛けてくれないかなあ」と頼んだ。「よし、分かった。間違いなく、支店長を攻めたてあんたをゴルフへ行かないですむようにしてやる。損保会社にとって、代理店がいかに大切か、と言うのが支店長の口癖だから。彼が支店長に頼まれたので、どうしてもコンペに行かなければならなくなった、と言つてきやがつたがそれは本当か。なんと代理店を軽く見ていることか。あんたは俺と彼との約束を反古にさせるつもりか。私の大事な計画をつぶす気なんやね。私にとつては彼がどうしても必要なんだ。もし、彼をコンペに行かせるならば、うちは代理店を止める。外の損保会社から代理店になつてくれとやかましく言つてきているのや、損保会社はあんたのところだけじゃない、とか何とか言つて、脅してやる。安心しろ」と彼は言った。

どうなるか、少しは心配だったが、彼に任すより他に手がない。たとえ、彼が失敗したとしても、私はもう日曜のゴルフには行かない。香織にあのような約束をした以上、退路は断つたつもりだ。そのことで不利益を被らうともいたしかたがない。それは受けて立つぐらいの勇気がなければなにもできない。

少し、大げさかもしれないが、そう会社の言うとおりを聞いてばかりはおれない。そんなことをしては、谷本さんの二の舞になる。私は今、底に穴の開いた小舟に乗っているようなものかもしれない。小舟は家なのか会社なのかわからないが、いずれにしても、小舟を岸に着けなければ沈没する。小舟といっしょに沈むわけにはいかない。

私は名刺を取り出して、居間へ帰り香織の前で、フランス料理店に予約を入れ、ゆっくりと彼女の前に座つた。

「先ほどの谷本さんの件だけど、私も香織と同じように、ひよつとして未必の故意的で、彼は殺されたのではないか、と思えてきた」

「でしょう。きっとそうよ。多くの奥さんは亭主が死んでくれないかな、なんて思っているのよ。そう週刊誌に書いてあつた。美容院で読んだの」

「おい、物騒なことを言うもんじゃないよ。お前もそう思っているのか」

「わからないわよ。まあ、今度の日曜日次第ね。フランス料理がおいしかったらしばらくの間はそう思わないことにするわ」

香織は始めてにこりと笑つた。私は慌てて台所へ行き、食器を洗い始めた。

「丁寧に洗うのよ。米粒が残つていたり、油がくっついていたら承知しないから」という声が聞こえた。だが、いつもより少し弱かつたように思う。

あれからかなり日が経つた。会社から帰るなり、香織は玄関まで出てきた。

「谷本の奥さんが合唱グループの誰かに言つていたんだって。警察から連絡があつて、ご主人の死因は事故死にきまつたそうよ。それで、保険金がスムーズに入るつて。みんなの

噂だけど最初の保険金は三千万だったのだけれど、後で一千万が追加されていたそうよ。それに退職金も入るし、彼のへそくりもあって、全部で五千万はくだらないって」

「ほう。それで、みんなはうらやましがっているのかい」

「いいえ、そんなことはないわ。でもすごいわね」そう言うと、変な笑い方をし、慌てて居間へ取って返した。

脱いだ靴を下駄箱にしまいながら、まあ、私は大丈夫だろう、支店長は私に謝ってくれて、ゴルフ行きは中止。先々週の日曜日には香織といっしょに観劇ができた。フランス料理店へも行けて、彼女は大喜びだった。それに、私の生命保険はたかだが一千万のはずで、リストラがなければまだ十年は働けるのだから。それに、私は香織にはまったく生命保険を掛けていない。

了